IRATSUME 2 (1978)

シーズン到来の前に考えたこと

谷角素彦

蝶を採集に出かける前には何とも言いようのない胸の高鳴りを覚えるものだが、最近こと但馬の野山でネットを振るのに、何故かあのワクワクするような感覚が薄らいでいたように思う。それは、自分自身、ただ採集するだけのマンネリズムに陥っていたからだろう。

ところが、ここ2年続けてその沈滞ムードを打ち破る出来事に遭遇し、但馬の蝶に新たな目を向けることができるようになった。

まず一昨年は出石町東床尾山へ赴いた際に、フいこの間迄、幻の蝶といわれたヒサマツミドリシジミと、過去但馬ではほとんど記録のないウラジロミドリシジミを採集した。また昨年は日高町金山峠で、県下では杉ヶ沢に次いで*2番目の記録と思われるオナガシジミと、但馬では同じく杉ヶ沢からのみ知られていた**キマダラルリツバメを各々数頭ずつ採集。2年間で貴重な4種の蝶を確認できた。

今シーズンも但馬の野山を歩き回るつもりであるし、どんな意外な蝶と出くわすか楽しみである。

こうした珍しい蝶を追い求める気持自体、それはそれでいいが、これらの出来事をきっかけに、私はむしろ身近な足元の蝶からもう一度じっくり見直すことの重要性を強く感じた。そこには見落としている興味深いことがあるはずだ。市街地の蝶であるエゾスジグロシロチョウやシルビアシジミの但馬での確実な記録は未だ聞いたことがないし、2種のキマダラヒカゲの分布もわかっていない。このような状態でどうして満足な蝶相の解明があり得ようか。上ばかり見上げているより、まず足元を埋めていく必要がある。

また、虫を愛する者の使命ともいうべき仕事が待っている。例えば、ヒサマツミドリシジミはその後の木下氏の調査で床尾山に多産することが判明しているが、食樹の伐採とマニアの濫獲から守るため、一刻も早く生態の実体をつかんで保護の手段を講じなければならない。過去、静岡県梅ヶ島で演じられた顛末(ヒサマツミドリの採卵を目的にマニアが私有地のウラジロガシをほとんど皆伐した)を決して但馬の地で繰り返さないためにも。

やるべきことは幾らでもある。こんなことを考えシーズンの到来を待っていると、忘れかけていた胸の鼓動が蘇ってくるようだ。

* 1964年7月30日に杉ヶ沢で中尾清三氏が記録。
** 1966年7月16日に中尾氏が、また1974年7月14日に豊高生物部が杉ヶ沢で記録。